

「We are one,
but we are many」

オーストラリア パース日本人学校 校長 中丸 俊晴

- 三密、緊急事態宣言、不要不急の外出、ステイホーム週間
- 3月14日、4月6日文科省で行われる辞令伝達式後の連絡をしあっている時、上記の言葉を誰が想像したことでしょうか。先行きが見えない中、早ひと月が経過しようとしています。そんな中、タイトルの言葉を耳にしました。それは、音楽の授業で取り組む、「I am Australian」の歌詞の一節です。「我々はひとつ。我々は一緒。」今、この歌を歌いながら、思いをパースに馳せています。
- さて、パース日本人学校は、児童生徒数現時点で31名、公立のCity Beach Primary School敷地内にある学校です。小規模校ですが、現地校とのコラボを通して、共存共栄していく新しいスタイルの日本人学校を目指しています。子供たちは、出張組、在住組、約半数ずつですが、英語教育、オーストラリアの歴史、日本の伝統文化、ESD等、未来を切り開く人材育成に努め、日々取り組んでいます。

- 当初、現地の公立学校再開が不確実だったため、4月22日から始業式・入学式をすべてオンラインで進める予定でした。しかし、公立学校が29日から再開を決めたことで、同じ日から通常登校で令和2年度1学期をスタートしました。日本に比べ、コロナ感染者数が少ないこと、徹底した入国禁止措置や外出規制等で、日常を少しずつとりもどしています。
- ただ、ソーシャルディスタンスや消毒やオンライン授業等、はるかに日本より進んだ施策をとっています。
- 日本人学校も保護者の送迎は門まで、集会は禁止、机を離す、うがい手洗いの励行、昼食時の管理、下校後の消毒（月2,000豪ドル）等に配慮して生活、学習を進めています。
- また、オーストラリアは遠隔地に住む児童生徒が多いため、オンライン遠隔プログラムが大変充実しています。オンライン授業も選択でき、もちろん出席扱いでです。
- 現在、日本人学校は全員登校ですが、今後このオンライン授業を選択した場合の対処も至急構築しなければならない課題です。

- 実は、当初、すべてオンライン授業で開始するに当たって、たくさんの問題点が浮上しました。
 - オンライン授業の質（オーストラリアの公立校や私立校に引けを取らないか）
 - Zoomを使うのか、Teamsを使うのか
 - 体育、音楽、技術家庭等の実技系をどう進めるか
 - 現地にいる先生と日本待機の先生との差はでてこないか
 - 小学校低学年は、オンライン授業に耐えられるか
 - 家庭での通信環境や通信機器の準備
 - 課題提出方法
 - 保護者の協力
 - 日本待機組の給与（シニアは無給らしい）などなど
- 中には、情報漏洩の心配のあるZoom使用では、入学を見送るという家庭もありました。（現時点で、すべてTeamsで授業や会議を進めています。）

- 実は、通常登校となつた今でも、日本待機組がオンライン授業に参加しています。
 - 小学校5年生 社会週3時間
 - 中学校2年生 社会週3時間
 - 中学校 技術週1時間
- 小学校5年の日本の国土、中学校の世界と日本の比較、技術の専門性などを考慮し、取り入れています。ただ、画面での授業が対面授業に勝るには、相当の中身の質を求められます。
- オンライン授業を展開する側に相当のプレッシャーになっているのは事実です。今後、行内研修で、このオンライン授業のレベルアップを図っていきたいと考えています。

- また、始業式・入学式は、日本待機組はTeamsのオンラインで参加、職員会議、打ち合わせ、児童生徒集会にもオンラインで参加します。さらに、学校運営委員会やPTA役員会、総会、日本人会理事会にもオンラインで参加です。
- この間の取り組みで困ったことは、小規模校ならではの課題ですが、保護者からの授業料免除、減免の要請です。コロナの影響で収入減になり、授業料免除や減免がなければ、入学を見送る、現地校への転校等を考えるという内容です。
幸い、学校運営委員会理事会での温かい判断で、申し出のあった保護者には70パーセント免除で通学を続けることができています。今後の経済活動が元に戻ればよいのですが・・・

- オーストラリアの素晴らしいことは、州政府やオーストラリア政府から私立学校である日本人学校にも、補助金を出してくれていることです。しかも、今回は、コロナウィルス対応で、補助金を増やしてくれたり、書類申請時期を遅らせてくれたり、細やかな配慮が随所に感じられました。まさに、「We are one, but we are many」です。この温かなオーストラリアに、日本の伝統文化、そして思いやりを融合すべく、一刻も早く赴任し、校務に専念したい気持ちです。

